

小貫大輔さん

(東海大学教養学部准教授)

世界を知らなくちゃいけないワケ

最近、「内向き」「ガラパゴス化」といった言葉で、海外に関心を持たなくなった若者の消極性が指摘されている。若いとき、日本を飛び出し、ブラジルのスラム街でボランティア活動をした小貫さんに、いまの学生、若者はどのように見えるのか。

薄らいだ儒教的価値観

——若者は内向きで元気が感じられないといった声を聞きます。いかがですか。

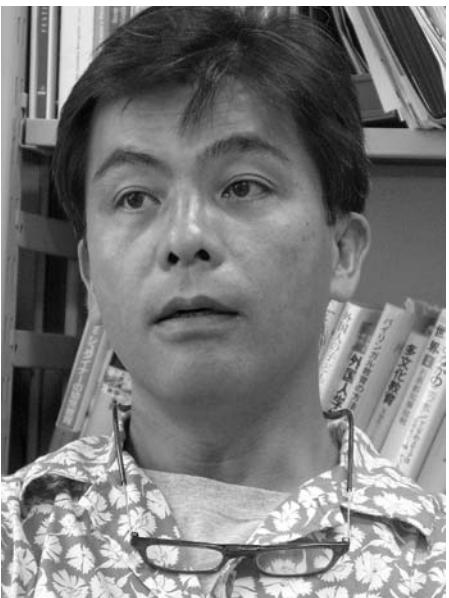
僕は、まったく逆の感想を持っています。二〇〇六年にブラジルから帰国して以来、大学の教員として若者と接していますが、学生たちがめきめきと垢ぬけていくのを感じます。

若いころ、僕自身は浮いていたというか、日本社会の儒教的な雰囲気は苦手でした。学生時代は、バリバ

リの体育会系(大学までバレーボール部に所属)で、上下の人間関係の中でそれなりに努力したのですが、実際は、まったくそぐわない人間でした。受け入れてもらいたい一心で頑張っていたんです。それはそれで青春って感じで良かったとは思いますが、ハワイに留学した後、ブラジルに行ったら、同調圧力の強い自己抑制の社会から解放された感じがしました。そこでは、自分らしさを追求することが当たり前で、「もう日本に帰れないな」と思ったんです。本当に楽しかった。ほぼ二十年、日本を離れていたことになるのですが、帰国してみると、毎年毎年、学生たちが旧来の日本的

な「とらわれ」から解放されていく感じがしますね。

最近の若い人は漢字もロクに書けないし、敬語も使えない……。たしかに、そういう面はあると思います。が、同時に、すごくあっけらかんとして、付き合いやすい。その傾向は毎年強まっています。ブラジル人のような学生が増えている(笑)、そういう気がします。



●おぬき・だいすけ 一九六一年、東京生まれ。東京大学大学院修了。ハワイ大学大学院のソーシャル・ワーク学部へ留学。八八年、「少数民族と性教育」をテーマに東京大学とハワイ大学から修士号を取得。その後ブラジル・サンパウロの貧民街で、シユタイナー思想に基づいた教育、医療を実践するボランティアに参加。NGOの国際協力活動を通して、市民が教育や福祉を担う新しい社会のあり方を提言している。著書に『ブラジルから来た娘タينا』(小学館)、『耳をすまして聞いてごらん』(ほんの木)など。

最近気づいたのですが、いまの十代は、兄弟を「お兄ちゃん」「お姉ちゃん」と呼ばないことが多い。授業で、日本人の儒教的な側面を説明しようと思って「(長幼を区別しない)欧米式のブラザーやシスターという呼び方と、お兄ちゃん・お姉ちゃんとは意味が違う」と話をしたら、「うちでは、お兄ちゃんなんて言いません」と言う。じゃあ何て言うのと聞くと、「アキラって名前と呼ぶ」と。「それは君の家庭の場合でしょ?」と聞くと、「私も言わない」「私も名前と呼ぶ」と何人もの学生が言うんですよ。一年生に聞くと、兄弟を「お兄ちゃん」「お姉ちゃん」と呼ぶのは半分以上くらいでしたね。しかし四年生に聞くと、まだ「お兄ちゃん」「お姉ちゃん」派が多い。家で兄弟を特別扱いはすることをやめたのかと、思ってるんですけどね。

学生時代、友人が「オレはやっぱ処女と結婚したい!」と言ったことを鮮明に覚えています。自分はいつかり彼女とセックスしているから、「なんだ、それは!」と思ったのですが(笑)。そんなわけのわからない時代を通過して、結婚前のセックスが当たり前になった。それが巡りめぐって晩婚という形に現れている。女の子の結婚が遅くなったのは、結婚前にセック